

日本語指示詞の内部照応用法 (文脈指示用法) について

——久野暲による分析の再検討——

大島 デイヴィッド 義和*

On the Endophoric Use of Demonstratives in Japanese:

A Reconsideration of Susumu Kuno's Analysis

David Yoshikazu OSHIMA

Abstract

Demonstratives in many languages can be used either exophorically or endophorically. Since Kuno (1973), it has been widely acknowledged that the choice of Japanese demonstratives (the distal *a*-series, the medial *so*-series, and the proximal *ko*-series) in their endophoric use is regulated by the rules that make reference to the speaker's and the hearer's knowledge of the referent. This paper reconsiders Kuno's influential analysis, points out some empirical problems with it, and proposes some modifications to deal with them. The *a*-series can be used only when it is assumed that both speaker and hearer recognize the referent, where the relation of "recognize" can be established by any kind of direct contact, however slight or brief it is. The *so*-series can be used only when it is assumed that one or both of the interlocutors does not recognize the referent. The *ko*-series can be used only when it is assumed that the speaker recognizes the referent but the hearer does not, and has the effect of imparting "vividness" to the depiction of the referent. These generalizations extend to the use of demonstratives in soliloquy, as well as in discourses that involve more than two participants.

1. はじめに

日本語の指示詞体系はコ-系列 (コレ, コノ, コチラ……), ソ-系列 (ソレ, ソノ, ソチラ……), ア-系列 (アレ, アノ, アチラ……) の3種から構成されており, また, どの系列の指示詞にも, 基本的な「外部照応用法 (exophoric use: 現場指示用法, 眼前指示用法とも)」と, 派生的な「内部照応用法 (endophoric use: 文脈指示用法とも)」を認めることができる¹⁾. (1) に指示詞ソノの外部照応用法と内部照応用法とを例示する.

- (1) a. あなたがお連れの, その犬は秋田犬ですか?
b. 近所の人が犬を飼っていて, その犬が夜中に吠えるので迷惑しています.

*名古屋大学大学院国際開発研究科准教授

外部照応用法の指示詞の使い分けは、概略次のような原則に従っている（佐久間1951：2-43, 服部1968など）²⁾。

- (2) i. 話し手に近いものにはコ-系列を用いる.
- ii. 話し手に近くなく、聞き手に近いものにはソ-系列を用いる.
- iii. 話し手にも聞き手にも近くないものにはア-系列を用いる.

このような、「人称指向型3分類」の指示詞体系は通言語的に珍しくなく、たとえば、タガログ語、タイ語、バスク語に同様の使い分けが見られる（Anderson & Keenan 1985: 280-288, Diessel 1999: 35-47, Huang 2007: 153-154）。

一方、内部照応用法の指示詞の使い分けに関しては、数多くの研究があるが、久野暲（1973）による一般化が要点を得たものとして（少なくともその基本となる部分は）広く受容されている（金水・木村・田窪1989：34-46, 井口・井口1994：112-115, 庵・高梨・中西・山田2001：3-5, など）³⁾。以下、本稿では、久野の指示詞論をあらためて検討し、いくつかの問題点を指摘したうえで、改善案を提示する。

2. 久野暲の指示詞論

久野（1973）は、内部照応用法（久野の用語では文脈指示用法）の指示詞のうち、ア-系列とソ-系列の使い分けは次の原則に従うと述べる（p. 185）。

- (3) **ア-系列**：その代名詞の実世界における指示対象を、話し手、聞き手ともによく知っている場合にのみ用いられる。
ソ-系列：話し手自身は指示対象をよく知っているが、聞き手が指示対象をよく知らないだろうと想定した場合、あるいは、話し手自身が指示対象をよく知らない場合に用いられる。

この原則の通り、(4a)では指示対象は話し手・聞き手に共通する知人なのでア-系列が選択され、(4b)では指示対象は話し手のみがよく知っている人物なのでソ-系列が選択される。

- (4) a. 昨日、山田さんに会いました。{あの／*その} 人、いつも元気ですね。
(久野1973：185；一部改変)
- b. A: 私の近所に山田さんという人が住んでいます。{*あの／その} 人はポルシェを持っています。
B: {*あの／その} 人、お金持ちなんですね。

また、コ-系列に関しては、(5) のような例を挙げ、「コ-系列も、目に見えないものを指すのに用いられる場合があるが、これは、あたかも、その事物が目前にあるかのように、生き生きと叙述する時に用いられるようで、依然として、眼前指示 [(外部照応)] 代名詞的色彩が強いようである」と述べている (p. 188).

(5) 僕の友達に山田という人がいるんですが、この男はなかなかの理論家で…….

(久野 1973 : 188)

また、目に見えないものを指す場合のコ-系列は、「話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない」ことを指摘し、そのような理由から、「単に、眼前指示であると言って片づけられない」と結論づけている (P. 189).

久野による一般化は、内部照応的に用いられるコ・ソ・アの使い分けの要点をよく捉えたものといえるが、以下の問題点を指摘することができる。

- (6) i. 「話し手も聞き手もよく知らない」対象を指示するケースが考慮されていない。
ii. 「話し手または聞き手がよく知らない」対象を指示する際に、ア-系列が選択される場合がある。また、「話し手がよく知らない」対象を指示する際に、コ-系列が選択される場合がある。
iii. 「話し手も聞き手もよく知っている」対象を指示する際に、ソ-系列が選択される場合がある。

問題点 (i) の「話し手も聞き手もよく知らない」対象を指示するケースとは、たとえば (7)・(8) のようなものである。この場合、用いられるのはソ-系列である⁴⁾。

(7) (AとBが、連れだって映画館の席につく。Aが、床に携帯電話が落ちているのを見つける。)

A : おや、誰か携帯電話を忘れていったみたいだ。

B : その人、今頃あわてているだろうね。

(8) (AとBはリサーチ・アシスタントとして学会運営の手伝いをしている。今日は仕事が多く、忙しい。午後に、もう1人新しいアシスタントが加わることになっているが、2人はその人物と面識がない。)

A : あとでもう1人来るよね。この仕事はその人に頼もう。

B : でも、その人が来るのは3時過ぎだよ。それからだと、今日中に終わられないかもしれないよ。

このようなケースは、ア-系列・ソ-系列の使用条件を (9)、あるいは (10) のように改めることで、

簡単に対処することができる。

(9) **ア-系列**：「話し手が指示対象をよく知っている」および「聞き手が指示対象をよく知っている」という2つの条件がともに満たされている場合にのみ用いられる。

ソ-系列：上記2条件のうち1つまたは両方が満たされていない場合にのみ用いられる。

(10) **ア-系列**：「すべての談話参加者 (discourse participant) が指示対象をよく知っている」という条件が満たされている場合にのみ用いられる。

ソ-系列：上記の条件が満たされていない場合にのみ用いられる。

(9)・(10) は2人の人物による会話を想定する限りでは全く同じ内容だが、(10) は独話や3人以上の会話にも適用されるため、より一般性が高いものと言える (6節を参照)。

以下、3節では、ソ-系列とア-系列の対立に焦点をあて、問題 (ii) とその解決について論じる。4節では、問題 (iii) を取りあげる。5節では、3・4節での議論を踏まえ、ソ-系列の扱いを再検討する。6節では、久野が考察の対象に含めていない、独話・多人数の会話における指示詞の使い分けについて考察する。

3. ア-系列指示詞が、話し手または聞き手がよく知らない対象を指示する場合

まず、久野の指示詞論のなかで重要な役割を果たす「(指示対象を) よく知っている」という概念について整理しよう。まず、生活をともにする家族や旧来の友人、頻繁に使用する所有物、日常的に訪れる場所、などは、問題なく「よく知っている対象」に含めてよいだろう。また、久野によれば、話し手・聞き手ともに知っている有名人も、指示詞の使い分けに関する限り、「(話し手・聞き手ともに) よく知っている」対象に含まれる。

一方、対話者の発言を通じて間接的に知った対象は、「よく知っている」とはみなされず、したがってそれを指示する際には、(7B) に示されるように、ソ-系列が用いられる。

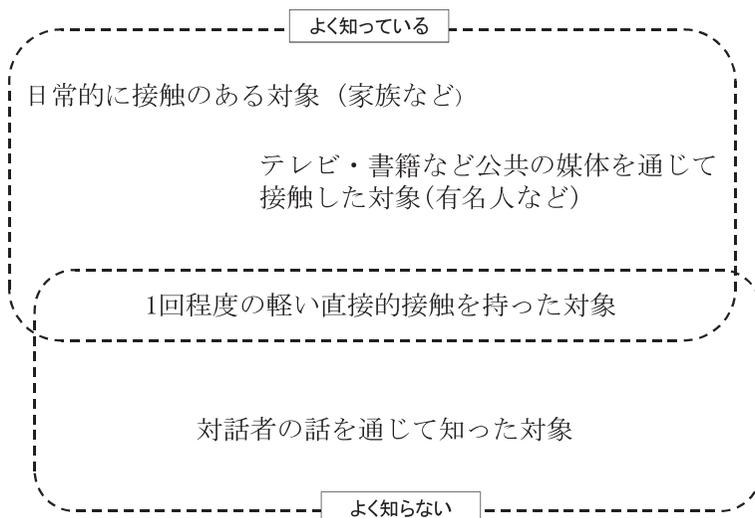
(11) A：昨日、山田さんという人に会いました。その人、道に迷っていたので助けてあげました。

B：{その／*あの} 人、どこに行くところだったのですか。

(久野1973：186-187；一部改変)

ある対象が「よく知らない」範疇から「よく知っている」範疇に移行する境界線について、久野ははっきりした基準を提示していないが、ある人物が話題になっているとき、話し手がその人物を知ってはいても、「1回ぐらいしか会っておらず、あまり彼をよく知らないという気分が強ければ」ソ-系列を使うことができる (p. 186)、と述べている (この主張の論拠となるデータは次節で取りあげる)。この記述に従うと、1度短く会話を交わしたり、見たことがあったりする

図1 久野 (1973) による「よく知っている」と「よく知らない」の区分



程度の接触を持った対象は、「よく知らない (ソ-系列の領域)」と「よく知っている (ア-系列の領域)」の境界域に属しているということになる (図1)。

しかし、久野の一般化に従えばソ-系列を用いることが期待されるにもかかわらず、ア-系列の選択が可能または必須な状況が存在する。このような状況には3種類がある。

まず、次のような会話を観察すると、「1回程度の軽い直接的接触」しか持っていない対象であっても、話し手・聞き手ともその接触のことをはっきり記憶していれば、ア-系列が用いられ、ソ-系列を用いることはできないことがわかる。

(12) (AとBは大学生で友人同士。2人はある会社の就職説明会に参加する。Aは先に到着し、会場で席についている。Bは後から到着し、Aを見つけ、横に座る。)

A: 受付の女の人, 美人じゃなかった?

B: うん, {あの/*その} 人, この会社の社員かな?

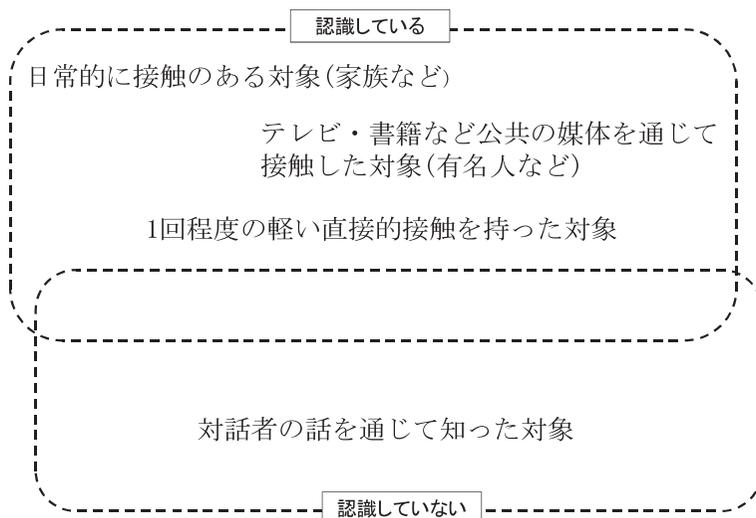
(13) (AとBは一緒に映画館で映画を見る。映画の上映中、後ろにすわった人が映画に感動して泣いている声が聞こえる。映画館を出て、2人はそのことを話題にする。)

A: 後ろの人, 泣いてたよね。

B: うん, {あの/*その} 人のせいで映画に集中できなかったよ。

こうしたデータを観察すると、ア-系列とソ-系列の使い分けに関わるのは、「(談話参加者が指示対象を)よく知っているか」ではなく、より浅いレベルの知識の有無であるということがわかる。便宜上、ア-系列の使用を可能にするレベルの知識を持っていることを、「認識している」と呼ぼう。

図2 指示詞の使い分けに関わる「認識している」と「認識していない」の区分



「会合の受付で見かけた」「映画館で後ろに座っていて、(顔は見えなかったが)泣いているのが聞こえた」程度の軽いものであっても、直接経験にもとづく接触があり、またその接触の機会のことをはっきり記憶していれば、「認識している」の範疇に含まれる(図2)。

一方、直接経験にもとづく接触があっても、その機会のことをはっきりと記憶していなければ、「認識している」の範疇には含まれない。

(14) (Aは看護師で、Bは医師。AがBに新聞の紙面を見せる。)

A : 昨日いらした患者さんが、新聞に載ってますよ。駅で倒れた人を、AEDで助けたんですって。

B1 : ふーん、{*あの/その} 患者さん、何時くらいに来た人?

B2 : 本当だ。{あの/*その} 患者さん、明日もう一度来るはずだよ。

次に、対話者の話を通じて知っただけの対象であっても、当該の対象が、発話時点以前の別の会話で話題にのぼっている(言及されている)場合、ア-系列の選択が必須となる。

(15) (AとBは兄妹。Aは市民管弦楽団に所属している。Bは外国人の手助けをするボランティア活動に参加している。)

A : うちの楽団に入ってきた新人、高校までスペインで育ったんだって。

B : じゃあ、バイリンガルなの?

A : うん、それに英語もうまいらしいよ。

(3日後)

B: ねえ, 私のボランティア・グループで, スペイン語ができる人がいなくて困っているんだけど, {あの/*その} スペイン育ちの人に紹介してもらえないかな?

最後に, 聞き手が「認識して」いない対象であっても, 話し手が聞き手に教示を与える場面では, 話し手がア-系列の選択を用いることが可能になる場合がある. より具体的には, 話し手が「聞き手が特定の属性(=P)を備えた個体を探している」と想定したうえで, Pを備えた個体を紹介するような発話では, ア-系列が使用されうる. ただし, このような条件下でも, ソ-系列の使用は排除されない⁵⁾.

(16) (AとBは同じ会社に勤めている. Bはスペイン語の書類を翻訳する必要があり, 辞書を片手に四苦八苦している.)

A: 経理課に配属された新入社員で, 高木っていう人がいるんですけど,
{あの/その} 人はスペイン語ができるらしいですよ.

B: ほんと? じゃあ, {*あの/その} 人に手伝ってもらおうかな.

黒田(1979)が久野の分析に対する反例として提示した次の例も, この条件に該当するとみなすことができる⁶⁾. (話し手は, 聞き手が「自分を指導してくれるよい先生」という属性を備えた個体を探していると想定している.)

(17) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど, 君も {あの/その} 先生につくとい
いよ. (黒田1979: 55; 一部改変)

上述の談話条件が満たされていないならば, 類似した発話であっても, ア-系列の使用は排除される.

(18) 僕は大阪で山田太郎という先生に教わったんだけど, さっき {*あの/その} 先生と東京
駅で偶然出くわして, びっくりしたよ.

(19) 学生時代, 寮で山田という医学部の男が同室だったんだけど, {*あの/その} 男が毎晩酒
や麻雀に誘ってきて, 断るのに苦労したよ.

なお, (16A)・(17)でア-系列が使用可能なのは, 聞き手が指示対象を認識している可能性がある(と話し手が考えている)からではない. (20)において, もし話し手が「聞き手が小田美雪を認識しているかどうか」について確信がない場合, 「小田美雪という女優」「(女優の)小田美雪」のどちらの形式を使用するか, 判断に迷うことが考えられる. しかし, たとえ確信がなくても, 「小田美雪という女優」という「聞き手が小田美雪を認識していない」ことを想定した表現を選択し

た場合には、その後ア-系列で小田美雪を指示することはできない。

- (20) a. 私は、小田美雪という女優のファンで、{*あの/その} 人が出演している映画は必ず映画館に見に行くようにしています。
b. 私は、(女優の) 小田美雪のファンで、{あの/*その} 人が出演している映画は必ず映画館に見に行くようにしています。

(16A)・(17) において、話し手は「XというY」という表現を用いている。これは、話し手が、当該の談話場面で「Xの指示対象を聞き手が認識していない」と想定していることを意味している。したがって、(16A)・(17) と (20a) のあいだの、ア-系列の使用可能性に関する対立には、「聞き手が指示対象を認識しているか」だけでなく「聞き手が探している、特定の属性を備えた個体を紹介するための発話であるか」という要因が関わっていると結論づけることができる。

以上のような観察を考慮すると、ア-系列・ソ-系列の使い分けの原則は、以下のように修整する必要がある。

(21) ア-系列：「すべての談話参加者が指示対象を認識している」または「談話参加者間の、発話時点以前の別の会話で、指示対象が話題にのぼった」場合にのみ用いられる。

ソ-系列：上記の2条件のうちのいずれも満たされていない場合にのみ用いられる。

(例外条件) 話し手が「聞き手が特定の属性 (=P) を備えた個体を探している」という想定をしたうえで、Pを備えた個体を紹介する場合、その個体を指示するのにア-系列を用いることができる。

4. ソ-系列指示詞が、話し手・聞き手ともによく知っている対象を指示する場合

「すべての談話参加者が指示対象を認識している」という条件が満たされていても、ソ-系列が用いられることがある。次の例では、聞き手が認識して（いると話し手が想定して）おり、話し手もまた認識している人物を指示するのに、ソ-系列を用いることが可能である（ア-系列も不可能ではないが、筆者の判断によれば容認度がやや落ちる）。

(22) (AがBのうちの訪ねてくる)

A：駅前ケーキを買ったんだけど、その店の店長さん、すごく面白い人だったよ。その人、若いころ、パリでお菓子作りの修行をしたんだって。

B：{その/(?)あの}人、私の幼馴染で、いまでもよく一緒に釣りに行ったりするんですよ。

(22) の場面では、AもBも指示対象を認識しているが、Aは「Bが指示対象を認識している」こ

とを知らない。(22B)でソ-系列が選好されることは、ア/ソ-系列の使い分けに関わるのは、「話し手が指示対象を認識しているか」ではなく、「話し手が指示対象を認識しており、なおかつ聞き手がそのことを知っているか」であることを示唆している。より一般化していうと、以下のようになる(「例外条件」については省略)。

(23) **ア-系列:**「すべての談話参加者が指示対象を認識していること」または「談話参加者間の、発話時点以前の会話で、指示対象が話題にのぼったこと」を、すべての談話参加者が知っている場合にのみ用いられる。

ソ-系列:上記の条件が満たされていない場合にのみ用いられる。

『すべての談話参加者が指示対象を認識していること』または『談話参加者間の、発話時点以前の会話で、指示対象が話題にのぼったこと』を、すべての談話参加者が知っている」という条件は、『すべての談話参加者が指示対象を認識している』という命題または『談話参加者間の、発話時点以前の会話で、指示対象が話題にのぼった』という命題が、談話参加者の共有知識の一部である」と言い換えることができる。

(22B)でア-系列も完全に容認不能でないのは、前提調節(presupposition accommodation)によるものと考えられる。例えば、次の例では、Bの発話は「過去に犬が逃げ出したことがある」ことを前提としている(Aが「過去に犬が逃げ出したことがある」という知識を持っていることを想定している)が、Aにその知識がなかった場合、Aはその場で推論を行なってその知識を補うことができる。

(24) A: どうかしたんですか。

B: うちの犬がまた逃げ出したんです。

同様のことが、(22)の場面でも起こっていると考えられる。(22A)に対してBが「ああ、あの人、面白いですよ」のように続けた場合、Aは「Bがケーキ屋の店長を知っている」という知識を、推論によって補うことになる。

興味深いことに、(22B)のような発話によって、「すべての談話参加者が指示対象を知っている」ことが確立された場合でも、その後にソ-系列を使い続けることは必ずしも不可能ではない。例えば、以下の例の(e)の「その」がこれに相当する。

(25) A: 昨日山田さんという人に会いました。その人、道に迷っていたので助けてあげました。

B: {(a) その/(b) *あの} 人、ひげをはやした中年の人でしょう。

A: はい、そうです。

B: {(c) その/(d) あの} 人なら、私も知っています。私も {(e) その/(f) あの} 人を助けてあげたことがあります。

(久野1973:186; 一部改変. 容認性判断は久野によるもの)

久野は、(c)・(e)の「その」が可能なのは、Bが当該の山田という人物を知ってはいるが、よく知ってはいないからとしている。しかし、前節の議論を踏まえると、この説明は妥当なものとは言えない。

(c)の「その」が可能なことは、(23)の一般化が予測するとおりである。(d)のように「あの」を用いた場合(この場面での「あの」の容認度は「その」に比べてやや落ちるように筆者には思われる)話し手は聞き手に「前提調節」を行うことを期待しているということになる。

(c)の替りに(d)を選択した(A-系列を用いた)場合、その次に(e)を用いる(S-系列に戻る)ことはできない。これは、久野による一般化でも、(23)の一般化でも、同様に予測されることである。

(23)の一般化にとって問題になるのは、〈(c), (e)〉の組み合わせである。(c)を含む文(「私もその人を知っています」)が発話された時点で、「すべての談話参加者が指示対象を認識している」ことは確立され、以降はA-系列を用いることが期待される。しかし、実際にはむしろ、(e)の「その」は(f)の「あの」と同等以上に自然に感じられる。この現象は、次のような例でも確認できる。

(26) (AとBは兄妹。Aは大学の3年生で、Bは1年生。Aは大学の管弦楽団に所属している。)

A: 管弦楽団に新しく女の子が入ったんだけど、すごく可愛いんだ。野本桂っていう名前
　　なんだけど。

B: 私、その子知ってる。私と同じ塾でバイトしてるから、{その/(?)あの}子のお父さん、
　　元プロ野球選手なんだって。

しかし、(27)・(28)に示されているように、「すべての談話参加者が指示対象を認識している」ことを明らかにする発話が行われた後、いったん発話者が交代すると、その後、S-系列の使用は不自然になる。

(27) A: 管弦楽団に新しく女の子が入ったんだけど、すごく可愛いんだ。野本桂っていう名前
　　なんだけど。

B: 私、その子知ってる。私と同じ塾でバイトしてるから。

A: へえ、{*その/あの}子、何の科目を教えているの? 英語?

(28) A: 管弦楽団に新しく女の子が入ったんだけど、すごく可愛いんだ。野本桂っていう名前
　　なんだけど。

B: 私、その子知ってる。高校のときテニス部で一緒だったから。

A: へえ、そうなんだ。そういえば、テニスが好きって言ってたな。

B: { *その / あの } 子のお父さん, 元プロ野球選手なんだって.

このような観察は, ある発話によって「すべての談話参加者が指示対象を認識している」ことが明らかになっても, そのあとターン・テークが起るまでは, 一種の猶予期間として, A-系列使用の条件が充足されていないと扱われる (少なくとも, 扱うことが可能である) ことを示唆している.

5. コー系列指示詞の内部照応用法

2節で述べたように, 久野は, コー系列指示詞が目前にない対象を指示する場合, 「話し手だけがその指示対象をよく知っている場合にしか用いられない」ことと「指示対象について生き生きと叙述する時に用いられる」ことを指摘している. 第一の条件は, 妥当性を持つものと考えられるが, 「よく知っている」という条件は上述した「認識している」に変更する必要がある. 以下の例では, 「話し手がよく知ってはいるが『認識して』おり, また, 聞き手はまったく知らない」人物を指示するのに, コー系列を用いることが可能である.

(29) 昨日映画館に行ったとき, 後に男の人が座ってたんだけど, ちょっと感動的なシーンになると { この / その / *あの } 人がやたらに声をあげて泣くものだから, 映画に集中できなかったよ.

ソー系列と異なり, コー系列は, 「話し手も聞き手も認識していない」対象を指すことはできない.

(30) (AとBはリサーチ・アシスタントとして学会運営の手伝いをしている. 今日仕事が多く, 忙しい. 午後に, もう1人新しいアシスタントが加わることになっているが, 2人はその人物と面識がない.)

A: 英語版プログラムの作成はどうでしょうか.

B: 後で来る人に頼もう. { その / *この } 人はアメリカに留学していたそうだから, 英語が得意なはずだ.

「指示対象について生き生きと叙述する時に用いられる」という第二の条件については, どのような場合に充足されるかがはっきりしないという問題があるが, 本稿では追求せず, 将来の課題としたい. (31) のような発話ではコー系列指示詞の使用は不自然なものとなるが, これは「生き生きとした叙述」の条件が満たされていないことによるものと考えられる. (久野自身は, この条件が成立しない場合にコー系列指示詞の使用が不可能になることを示す例を挙げていない.)

(31) (「昨日の夜は何を食べたの?」と尋ねられて)

帰りにコンビニでレトルトのカレーを買って、うちで {それ/??これ} をご飯にかけて食べた。

- (cf.) 昨日コンビニでレトルトのカレーを買ったんだけど、{それ/これ} がすごくおいしくてびっくりしたよ。

上記の内容を踏まえると、(23) の一般化に加えるべきコ-系列の項目は以下のようなものになるだろう。

- (32) コ-系列:「話し手が指示対象を認識しており、なおかつ、談話参加者のなかに指示対象を認識していない者がいること」をすべての談話参加者が知っている場合にのみ用いられる。また、「話し手が指示対象について『生き生きとした叙述』を行う」発話においてのみ用いられる。

6. 独話・多人数での会話

(23)・(32) の一般化—以下にまとめて再掲する—は、2人による会話だけでなく、独話および3人以上による会話にも適用できる⁷⁾。

- (33) ア-系列:「すべての談話参加者が指示対象を認識していること」または「談話参加者間の、発話時点以前の会話で、指示対象が話題にのぼったこと」をすべての談話参加者が知っている場合にのみ用いられる。

ソ-系列:上記の条件が満たされていない場合にのみ用いられる。

コ-系列:「話し手が指示対象を認識しており、なおかつ、談話参加者のなかに指示対象を認識していない者がいること」をすべての談話参加者が知っている場合にのみ用いられる。また、「話し手が指示対象について『生き生きとした叙述』を行う」発話においてのみ用いられる。

まず独話について考えると、単純に、話し手(=唯一の談話参加者)が指示対象を認識していればア-系列を用い、そうでなければソ-系列を用いることになる。コ-系列は、「話し手以外に指示対象を認識していない談話参加者がいる」ことが使用の必要条件に含まれるため、決して用いられない。

- (34) (Aは平田と面識がなく、Bはそのことを知っている。Bは平田と以前から面識がある。)

A: 荒木部長に、「ニューヨークへの出張には営業部の平田くんも同行することになった」と聞いたとき、どう思いましたか。

B: {あの/*その/*この} 人、英語はできるのかな、と {思いました/心の中でつぶや

きました}.

(35) (Aは高橋と面識があり、Bはそのことを知っている.)

A: 荒木部長に、「来月、この部署に高橋くんという新人が配属されることになった」と聞いたとき、どう思いましたか.

B: {*あの/その/*この} 人がパソコンに詳しい人だと助かるな、と {思いました/心の中でつぶやきました}.

以下の例では、聞き手が認識していない対象を指すのに「あの」が用いられているが、これは、発話の当該部分が、あたかも独話であるかのように提示されている—宮崎・他 (2002:282) のいう「擬似独話」である—ために許容されると考えられる.

(36) 学生時代は、お金がなかったから毎日のように大学の近くの小汚い定食屋で夕飯を食べていました。あの定食屋、今でもまだあるのかなあ.

黒田は、以下の例におけるア-系列の使用可能性が、久野による分析にとって問題になると述べているが、これも、「独話環境におけるア-系列の使用」の一例と捉えることができる。(したがって、この例は本稿の分析への反例とはならない.)

(37) 今日神田で火事があったよ。{(?) あの/*その} 火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。
(黒田1979:55;一部改変)

ただし、思考述語「思う」で報告される内容を表す引用部分が、すべて「独話的環境」であるとは限らない。(38)ではソ-系列の使用が自然だが、これは、指示詞の選択が、聞き手の知識を考慮したうえで—つまり、対話的環境と同様の方式で—なされうることを示している。換言すると、「思う」の引用部分における指示詞は、「直接引用的」に選択・使用される場合と、「間接引用的」に選択・使用される場合があり、(38)では「間接引用的」な方式が可能でありかつ選好されるということである。

(38) 今日神田で火事を見たよ。でも、{(?) あの/その} 火事はもう消し止められたと思う。

例(37)で「その」が排除される—つまり、「間接引用的」な方式が許容されない—のは、「～のことだから」という、話し手による推論の流れを示す表現が、一種の独話標識として働いているという理由によるものと考えられる。

次に3人以上の会話の場合、話し手が指示対象を認識していて、なおかつ、複数の聞き手のうち、指示対象を認識している者と認識していない者が混在している場合、ソ-系列ないしコ-系列が用

いられる。

- (39) (部長が、5人の部下に向けて話している。部下のなかには、鈴木が含まれる。)
明日から、この部署に佐藤博という人が配属されます。その人は鈴木君の甥っ子に当たる人で、私も一緒に仕事をしたことがあります。鈴木くんに似て、大変に真面目な人です。金曜日にその人の歓迎会をするので、なるべく予定をあけておいてください。
- (40) (中学校の野球部の監督が、10人の部員に向けて話している。部員の中には山田次郎が含まれる。)
もう知っているかもしれませんが、以前このクラブにいた、山田太郎さんが、埼玉西武ライオンズに入団することが決まりました。この人は山田次郎くんのお兄さんで、私もよく覚えておりますが、中学校時代から大変練習熱心でした。山田君も立派なお兄さんを持って鼻が高いと思います。みなさんも、山田太郎さんを模範として、練習に一層励んでほしいと思います。

7. 結語

以上、久野暉(1973)による日本語指示詞の内部照応用法の分析を再検討し、その問題点を指摘するとともに、より妥当な分析を提示した。主要な変更点は、(i) 指示詞の使い分けに関わるのは、「(すべての) 談話参加者が指示対象を知っているか」ではなく、「『(すべての) 談話参加者が指示対象を知っていること』を(すべての) 談話参加者が知っているか」であるとしたこと、(ii) 指示詞の使い分けに関わるのは、指示対象について「よく知っている」かではなく、単に見たことがある程度の浅いレベルの知識を持っているか否かであるとしたこと、の二点である。

本稿では、いわゆる束縛変項解釈を代表とする、指示詞が現実世界に特定の指示対象を持たない場合についてはとりあげなかった。

- (41) a. どの都市にも、その都市を代表する料理がある。
b. もし100万円入った財布を拾ったら、それを交番に届けますか？

このような指示詞の使用に対処するためには、本稿で提示した分析を、一般的な照応の理論(たとえばKamp & Reyle 1993, Kamp, Genabith & Reyle 2011のもの)に組みこむ必要がある。将来の課題としたい。

また、本稿では対話・独話の場合にあらわれる指示詞のみを検討したが、論説文などの書き言葉においては、話し言葉の場合とは異なった指示詞の使い分けの原理が働いている。これについても別稿で取りあげたい。

注

1) Diessel (1999: 93-114) は、指示詞の用法を (i) exophoric (外部照応的) と (ii) endophoric (内部照応的) の2つに分類し、さらに後者を、(ii-a) anaphoric (前方照応的), (ii-b) discourse deictic (談話直示的), (ii-c) recognitional (認識的) の3つに下位分類している。本稿における外部照応・内部照応の区分は Diessel による exophoric/endophoric の区分と一致するが、談話直示用法 (指示詞が命題や発話行為を指示対象とする場合) については考察の対象から外す。

Diessel による前方照応用法・認識用法の区分は、「指示詞が先行する談話に現れる名詞句と照応関係を持つか否か」に関わるものである。本論文 (4a) における「あの (人)」は前方照応用法に相当し、会話の冒頭で「ねえ、あの本、持ってきてくれた？」という発話が行われた場合の「あの (本)」は認識用法に相当する。本稿での議論 (特にア-系列に関わる部分) は、どちらの用法に対しても適用されるものである。

なお、Diessel は、一般に認識用法の指示詞は名詞修飾的に用いられ、独立した名詞句として用いられることはないとして述べている (p. 36: ただし、例外が存在する可能性についても注釈で言及している)。日本語の「あれ」は、認識的な使用が可能であり (例: 会話の冒頭での「ねえ、あれ、持ってきてくれた?」)、この原則には合致しない。

- 2) ただし、外部照応用法の指示詞に関して、(2) に示した一般化では説明しきれない用例が存在することが、阪田 (1971)、堀口 (1978)、Yoshimoto (1986)、日本語記述文法研究会 (2009: 26-29) などで議論されている。
- 3) 久野 (1973) の指示詞論とほぼ同内容のものが、Kuno (1973: 282-230) において英語で解説されている。久野 (1973) とは異なる方向の分析としては、黒田 (1979)、田窪 (2008)、堤 (2012) らのものが挙げられる。
- 4) 査読者より、(7) の場面では「この (人)」も自然に用いることができるとの指摘を受けた。これは、離席した人物の荷物を指して「この人、どこに行っちゃったの?」と尋ねたり、聞き手が抱える店舗のロゴが入った紙袋を指して、「そのお店、僕もよく行くよ」と述べたりする場合に類する、転移的な外部照応用法にあたると思われる。
- 5) 紹介される対象が人物以外の場合、このようなア-系列の使用が可能であるかどうかははっきりしない。(iB) における「あそこ」の使用は、筆者にとっては、やや容認度が落ちる。

- (i) A: 仕事で京都に一ヶ月ほど行くことになったんですけど、京料理が食べられる美味しいお店とか、知りませんか?
B: 烏丸にある山水亭っていう店に何回か行ったことがあるんだけど、{? あそこ/そこ} は雰囲気もいいし、値段も高くないし、行ってみるといいよ。

また、(16B)・(17) のような、紹介される対象が人物であるような場合でも、話者によって判断にゆれがあり、ア-系列の使用を不自然と考える話者もいるようである。

- 6) これとは別に、黒田 (1979) は、「今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ」という例を、久野による分析への反例として挙げている。この例については、6節で取りあげる。
- 7) 独話における指示詞の用いられ方については、黒田 (1979) などでも議論されている。

参考文献

- Anderson, Stephen R. & Edward L. Keenan. 1985. Deixis. In: Timothy Shopen (ed.). *Language Typology and Syntactic Description: Grammatical Categories and the Lexicon*, Vol. 3. pp. 259-308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Diessel, Holger. 1999. *Demonstratives: Form, Function and Grammaticalization*. Amsterdam: John Benjamins.
- 服部四郎. 1968. 「コレ・ソレ・アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』pp. 71-80. 三省堂.
- 堀口和吉. 1978. 「指示語「コ・ソ・ア」考」『論集日本文学・日本語5: 現代』pp. 137-158. 角川書店.

- Huang, Yan. 2007. *Pragmatics*. Oxford University Press.
- 井口厚夫・井口裕子. 1994. 『日本語文法整理読本—解説と演習—』バベル・プレス.
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘. 2001. 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- Kamp, Hans & Uwe Reyle. 1993. *From Discourse to Logic: Introduction to Modeltheoretic Semantics of Natural Language, Formal Logic, and Discourse Representation Theory*. Dordrecht: Kluwer.
- Kamp, Hans, Josef van Genabith & Uwe Reyle. 2011. Discourse Representation Theory. In: Dov M. Gabbay & Franz Guenther (eds.) *Handbook of Philosophical Logic*, vol. 15 (2nd edition). Dordrecht: Springer. pp. 125–394.
- 金水敏・木村英樹・田窪行則. 1989. 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ4—指示詞—』くろしお出版.
- 久野暲. 1973. 『日本文法研究』大修館書店.
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge: The MIT Press.
- 黒田成幸. 1979. 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と—林栄一教授還暦記念論文集—』くろしお出版. pp. 41–59.
- 阪田雪子. 1971. 「指示語「コ・ソ・ア」の機能について」『東京外国語論集』21: 125–138. 東京外国語大学.
- 佐久間鼎. 1951. 『現代日本語の表現と語法』改訂版. 厚生閣.
- 田窪行則. 2008. 「日本語指示詞の意味論と統語論—研究史的概説—」寺村政男・久保智之・福盛貴弘(編)『言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』pp. 311–338. 大東文化大学語学教育研究所. [田窪(2010)に再掲]
- 田窪行則. 2010. 『日本語の構造—推論と知識管理—』くろしお出版.
- 堤良一. 2012. 『現代日本語指示詞の総合的研究』ココ出版.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃. 2002. 『モダリティ』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会. 2009. 『現代日本語文法7』くろしお出版.
- Yoshimoto, Kei. 1986. On Demonstratives KO/SO/A in Japanese. 『言語研究』90: 48–72.